

# 激減しているシギ・チドリを通して、 夢洲を考える

文  
写真

加賀まゆみ(夢洲生きもの調査グループ)  
夢洲生きもの調査グループ(撮影:小野 款司)



写真-1 セイタカシギ抱卵 2024.5.23  
新しい命の誕生に期待したが、この後の豪雨で水没した。

セイタカシギが、この夏も夢洲で繁殖していた。2024年8月中旬の調査で合計22羽(成鳥10羽、幼鳥5羽、少し大きめのヒナ4羽、小さなヒナ3羽)を確認。抱卵中らしき体勢の個体もいたのもっと増える可能性もある。

2021年7月、3,000羽を越すコアジサシの大集団が旅立ったあとの湿地に、ひっそりと座り込むセイタカシギを見つけた。撮影した画像には、体の下にヒナらしきものが映っていた。それが夢洲でのセイタカシギ繁殖の私たちの初確認である。その翌年は、その場所の埋め立て工事が始まり、調査に入ることが許可されなくなった。

監査請求などをきっかけにした交渉の結果、2023年度7月より港湾局職員の同行で、一部エリアだけ再び調査に入ることが可能になり、野鳥の会大阪支部とともに、月一回の調査を続けている。2023年には残っている水辺でセイタカシギが子育てをしていた。そして、今年2024年、さらに多くの数の夢洲生まれの個体を確認した。セイタカシギの日本での継続的繁殖地は数か所程度と言われ、関西では夢洲だけかもしれない。今の繁殖場所は、万博の大屋根リングの南側にまだ手つかずに

残っている湿地の片隅だが、ここは年内にも水を入れられ、万博期間中、水深1.5mの「つながりの海」となる。来年、セイタカシギが夢洲に戻ってきても、この場所はない。

日本は、東アジア・オーストラリア地域フライウェイのちょうど中間地点であり、大阪湾奥は全国でも指折りのシギ・チドリ数の受け入れ地である。だが、安心して滞在できる自然の海浜・干潟の減少で、ここにくるシギ・チドリはこの20年で半減した。渡りの途中で十分な休息と補給、繁殖などができなければ、絶滅への道が加速する。沿岸の開発が進む現代、人間がほったらかしのまま置いていた広大な夢洲と人間が踏み込まない南港野鳥園は、野鳥たちにとって、とびきりスペシャルな楽園だったに違いない。

私たちの調査でカウントした鳥類は、7月は24種268羽(うち絶滅危惧18種242羽)、8月は24種195羽(うち絶滅危惧17種164羽)であった。(記録:野鳥の会/※準絶滅危惧も含む) 以前の3分の1ほどの面積に減った湿地だが、これだけの絶滅危惧種が今も来ていて、その中で15種がシギ・チドリ類





写真-2 セイタカシギのヒナ(写真中央) 2024.8.15  
前回の抱卵時は水没したが、再度抱卵し、雛が2羽誕生した。



写真-3 大屋根リング建設現場ぎわの浅瀬が営巣場所。工事により干潟が狭くなったといっても鳥のいるところまではかなり遠い。2024.8.15



写真-4 調査風景(野鳥の会とともに) 2024.8.15  
以前は生えていなかったヨシが、あっという間に広がっている。



写真-5 セイタカシギの親子 2024.7.30  
すでにこんなに大きくなった幼鳥を連れている。(後ろの2羽が幼鳥)

である。夢洲のポテンシャルの高さを実感する。こんな素晴らしい場所であるにもかかわらず、万博の閉幕後、この「つながりの海」は埋められるそうだ。せめて、もとの湿地に戻してほしい、と行政に要望しているが、「まちづくり計画」によって、すぐ埋め立てられ、売却の計画となっている。(ここが、市長意見の矛盾である。※「都市と自然」2024年6・7月号参照)

私たちは、2019年冬、初めて訪れた夢洲の池に5000羽のカモがのんびり浮かんでいるのを見て、この風景を未来に残したい、と心の底から思った。だが「開発されることが決まっている場所だから、自然を残すことは想定していない」といرونなところで何度も言われ、先に調査に入っていたグループからは今更遅いと笑われた。2020年、コロナ禍で何もかもが

停止した時期、偶然みつけたコアジサシの巨大コロニーを守るために声をあげた。これをスタートに、夢洲の自然の素晴らしさを発信し続けてきたのだが、今、同じスタンスで声をあげ続けることを、万博反対運動かと懸念を示す人、政治的だと嫌がる人もいる。私たちは、夢洲にいた生きものたちにとって良好な居場所が、これからはずっとこの大阪にあればいい、と思っただけなのだが、世間はそう単純ではないようだ。そのため、万博が無事終わるまではとりあえず、「welcome to 大阪湾ーみんなで守ろう!海わたる鳥」という天王寺動物園での写真イベントのタイトルで表現されるような面構えにモードチェンジして、虎視眈々と夢洲の自然再興の道を探っていこうと思っている。

高い山の登山道は、ひとつではない。今は、野鳥の会とともに「大

阪湾岸にシギ・チドリの生息環境の復元を」という道を、学びながら登っている。シギ・チドリの生息環境の保全を考えることは、夢洲の自然を考えることからスタートした。夢洲に来ていた野鳥たちの明日を考えることは、多くの絶滅危惧種を守るための活動となり、ひいては夢洲の自然の価値の再認識へとつながっていく。今年の大阪自然史フェスティバルでのシンポジウムでも、私たちの根底に流れるテーマは同じだ。

荒唐無稽に見えるだろうが、2019年に5,000羽のカモが浮かぶ夢洲の池を見て、私たちが心に描いた夢＝「広大な自然保護区を大阪に」は、「昆明・モンテリオール生物多様性枠組」で採択されたネイチャーポジティブ、本気の「30 by 30」そのものだと思うのである。